

日本におけるジェイン・オースティン書誌

——翻訳・翻案書目4——

田村道美

凡例

1. 本書目は、1926 [大正15年] より2008 [平成20] 年6月までの間にわが国で刊行されたジェイン・オースティン (Jane Austen, 1775-1817) の作品の翻訳・翻案についての書目である。
2. 本書目作成に当たっては、1点を除いてすべて筆者架蔵本について記事を採用した。架蔵していない1点についても、所蔵図書館より借り受け、実物にあたった。
3. 項目の排列は刊行順とし、各項目の前に通し番号を付した。ただし、上・下2巻で刊行された場合には、1-1、1-2という番号の付し方をした。
4. 項目の記載は、訳書名、訳者、初版発行年月日、発行所、定価、収録作品、体裁、構成、表紙・カバー・帯の巻句、使用原書の順とし、最後に筆者による解説を付した。
5. 訳書名は、原則として表紙および扉に記載のものを採り、表紙・扉・奥付等の記載の間に相違がある場合には解説にその旨を記した。なお、訳書名等の漢字・仮名遣いは原本の表記に従った。
6. 初版刊行年については、奥付の記載が元号の場合は西暦に換算し、元号は[]内に示した。奥付の記載が西暦の場合にも、一貫性を考えて、[]付きで元号を付した。また、奥付等の数字が漢数字の場合はアラビア数字に改めた。
7. 使用原書については、訳者が解説等で使用した原書を明記している場合、その箇所を「 」を付してそのまま引用した。
8. 筆者の解説の冒頭に、訳書の原題とその初版発行年を示した。ただし、少女期の作品については推定執筆年を示した。
9. 訳書の多くでオースティンの肖像画が口絵として使用されている。オースティンの肖像画は姉カサンドラのスケッチ画 (ロンドン・ナショナル・ポートレート・ギャラリー蔵) が唯一のものであるが、別に、甥ジェームズ・エドワード・オースティン＝リーが『想い出のジェイン・オースティン』(1870) 刊行に際して、その巻頭を飾るためにアンドルーズなる人物に依頼した肖像画がある。口絵等がカサンドラのスケッチ画の場合は、口絵の後に(カサンドラ筆)を、アンドルーズ氏の手になる肖像画の場合には(アンドルーズ筆)を付した。

32 『オースティン エマ』

訳者 阿部知二

初版発行 1995 [平成7] 年1月20日

発行所 中央公論社

定価 1,600円 (本体1,553円)

収録作品 『エマ』

体 裁 18×12.8cm。厚紙装、丸背、カバー、帯。

構 成 扉、口絵肖像(カサンドラ筆)、本文(2段組、pp.5-472)、フィリップ・ゴフ(マクドナルド版)の挿画34枚。「解説・年譜」(阿部知二)pp.474-494。写真10枚。

月 報 「オースティンの心地良さ」(金井美恵子)pp.1-4。

「読書の手引き」pp.2-3。

「主な登場人物」が印刷されたしおり付き。

帯文(表) 「新装 世界の文学セレクション36 豪華挿画／詳細解説・年譜付」

使用原書 「テキストは、R. W. チャップマン博士編纂の「ジェイン・オースティン」小説集(5巻、オクスフォード大学出版部、初版1923年)の第4巻「エマ」を使用した。…挿画はマクドナルド版、フィリップ・ゴフ画を掲載した。口絵のオースティン像は姉カサンドラが描いたもの(ロンドン・ナショナル・ポートレイト・ギャラリー蔵)である。」

解 説 *Emma*の訳本。「新装 世界の文学セレクション36」全36巻内の第8巻(第33回配本)として刊行。30年前の1965〔昭和40〕年4月10日に刊行された「世界の文学」第6巻『オースティンエマ』と同一の内容・構成である。ただし、月報の頁数が11頁から4頁に減り、執筆者も金井美恵子ただ一人となっている。

33 『オースティン『レイディ・スーザン』—書簡体小説の悪女をめぐる—』

訳 者 惣谷美智子

初版発行 1995〔平成7〕年7月20日

発行所 英宝社

定 価 2,678円(本体2,600円)

収録作品 『レイディ・スーザン』

体 裁 19.4×13.3cm。クロス装、丸背、カバー、帯付。

構 成 扉、「レイディ・スーザン」pp.7-164。

「作品論『レイディ・スーザン』」pp.167-203。

「作家論 ジェイン・オースティン」pp.207-261。

「あとがき」pp.263-265。

「年譜」pp.266-270。

帯 文 「作家としての早世を惜まれる」. オースティンが、10代の想像で創造した女ざかりの悪女を、女ざかりの30代で清書した書簡体小説*Lady Susan*の本邦初訳なる。」

使用原書 「『レイディ・スーザン』はJane Austen, *The Works of Jane Austen* vol. VI. *Minor Works: Lady Susan*, ed. R. W. Chapman, (1954: London: Oxford University Press, 1975)の全訳であり、邦訳としてはこれが初めてのものになる。」

解 説 *Lady Susan*の本邦初訳本。惣谷美智子(1945-)は英文学者。刊行当時の身分は羽衣学園短期大学助教授。オースティンの研究書として『ジェイン・オースティン研究—オースティンと言葉の共謀者達—』(旺史社、1993〔平成5〕年6月20日)がある。

34 『いつか晴れた日に—分別と多感—』

訳 者 真野明裕

初版発行 1996〔平成8〕年6月1日

発行所 キネマ旬報社

定 価 1,800円 (本体価格1,748円)

収録作品 『いつか晴れた日に』

体 裁 19.4×13.6cm。厚紙装、丸背、帯、カバー。

構 成 扉、「本文」pp.3-394。「訳者あとがき」pp.395-398。

帯文(表) 「95年度アカデミー賞最優秀脚色賞受賞／「理知」のエリナか、「情熱」のマリアンか／みどり豊かな19世紀英国の田園を舞台に／愛と結婚の真実に迫る、必読の《新・恋愛入門》／英米で大ヒット、話題の映画原作！／東京ニュー東宝シネマ1 大阪三番街シネマほか全国ロードショー」

帯文(背) 「ジェーン・オースティン／95年度アカデミー脚色賞受賞」

帯文(裏) 「200年超えオースティン再び。英米で映画・TV大人気(朝日新聞)／聡明で繊細な観察から生まれる軽やかなアイロニーによって描写する書き方が「知的な居心地の良さ」をもたらす(作家・金井美恵子氏、朝日)／登場する女性たちは、一見上品で繊細だが、実は男性の本性を見抜く骨太でタフな精神の持ち主で、現代的な女性に通じるものがあるのではないのでしょうか(英文学者・海老根宏氏、朝日)／「いい結婚相手探し」がテーマ。米英にオースティン旋風(毎日新聞)／お行儀いいのが新しい。人気の秘密は上品な社会への回帰願望(ニュース・ウィーク)」

使用原書 不明。

解 説 *Sense and Sensibility* の訳本。1995年製作のアメリカ映画(2時間16分) *Sense and Sensibility* の日本公開に合わせて刊行された。『いつか晴れた日に』は邦画のタイトルに合わせたもの。同映画は主役を演じたエマ・トンプソンが8年かけて書き上げた脚本によっている。彼女の努力は第68回アカデミー賞脚色賞、第46回ベルリン国際映画祭金熊賞受賞作品という形で報われた。

映画『いつか晴れた日に』(配給：日本ヘラルド映画)の製作スタッフや主な出演者は以下のとおり。

監 督：アン・リー Ang Lee

製 作：リンゼイ・ドーラン Lindsay Doran

製作補：ジェームズ・シェイマス James Schamus

脚 本：エマ・トンプソン Emma Thompson

撮 影：マイケル・コールター Michael Coulter

音 楽：パトリック・ドイル Patrick Doyle

出演者：エマ・トンプソン Emma Thompson (エリナー・ダッシュウッド役)

アラン・リックマン Alan Rickman (ブランドン大佐役)

ケイト・ウィンスレット Kate Winslet (マリアンヌ・ダッシュウッド役)

ヒュー・グラント Hugh Grant (エドワード・フェラーズ役)

グレッグ・ワイズ Greg Wise (ジョン・ウィロビー役)

エミリー・フランソワ Emilie Francois (マーガレット・ダッシュウッド役)

イモージェン・スタップス Imogen Stubbs (ルーシー・スティーレル役)

ジェマ・ジョーンズ Gemma Jones (ダッシュウッド夫人役)

ロバート・ハーディ Robert Hardy (ジョン・ミドルトン役)

エリザベス・スプリッグス Elizabeth Spriggs (ジェニング夫人役)

訳者の真野明裕はオースティンの英語の特徴や訳出に際して留意した点等について次のように述べている。

彼女の生きた時代は日本で言えば江戸時代後半にあたり、その作品は後期近代英語で書かれ

ており、一見現代英語と格別変わりはないが、その実、同じ語でも現在とはまったく違う意味だったり、いまでは死語になっていたりするものが少なくない。また、これは作者の文体に関することだが、詩で韻を踏むための技法として使われる倒置法が多用され、左から右へすらすら流れるように読めるという文章ではない。文語体としての技法ということもあるが、登場人物のああでもないこうでもないという心の揺れを効果的に描き出すために計算された必然的な表現法でもあるだろう。

そのへんを心して、なおかつ、現代の読者の言語感覚になるべく違和感のないような現代語訳をめざした。「古典の名品を教養として」読むのではなく、現代にも通じる人間的興味に溢れる一個の文芸作品として読んでほしいからである。とって、翻案ではない以上、18世紀末のイギリス中産階級の人々の物語という状況設定とずれがありすぎても、別種の違和感が生じるので、現代語化にもおのずと限度はあった。また、訳者はオースティンの専門研究者ではないので理解の到らない点もあるかもしれない。正直なところ、オックスフォード大辞典(OED)に当たってもなお釈然としない点が二、三残っている。

35 『美しきカサンドラ ジェイン・オースティン初期作品集』

訳者 都留信夫監訳

初版発行 1996〔平成8〕年7月25日

発行所 鷹書房弓プレス

定価 2,500円(本体2,427円)

収録作品 「ジェイン・オースティン初期作品集 第1巻」、「ジェイン・オースティン初期作品集 第2巻」

体裁 19.5×13.5cm。クロス装、丸背、カバー、帯。

構成 扉、「まえがき」(都留信夫) pp.1-2.

第1巻

「フレデリックとエルフリーダ」(中井理香訳) pp.7-17.

「ジャックとアリス」(清水明/津久井良充訳) pp.18-41.

「エドガーとエマ」(戸田勉訳) pp.42-46.

「ヘンリーとイライザ」(谷田恵司訳) pp.47-56.

「ハーリー氏のおかしな体験」(向井秀忠訳) pp.57-58.

「サー・ウィリアム・モンタギュー」(向井秀忠訳) pp.59-62.

「クリフォード氏の憶い出の記」(向井秀忠訳) pp.63-65.

「美しきカサンドラ」(向井秀忠訳) pp.66-70.

「アミーリア・ウェブスター」(向井秀忠訳) pp.71-75.

「訪問」(高倉章男訳) pp.76-85.

「謎」(高倉章男訳) pp.86-90.

「三姉妹」(市川薫訳) pp.91-112.

「断片」(谷田恵司訳) pp.113-116.

「憐れみに寄せる頌詩」(谷田恵司訳) pp.117-118.

第2巻

「愛と友情」(向井秀忠訳) pp.121-168.

「レズリー城」(清水明/津久井良充訳) pp.169-211.

「イングランドの歴史」(中井理香訳) pp.212-229.

「手紙あれこれ」(市川薫訳) pp.230-259.

「断片」(高倉章男訳) pp.260-271.

「あとがき」(向井秀忠) pp. 273-286.

帯文(表) 「静かだが確固たる価値観に支えられた辛辣なる人間諷刺で、現代に通じる文学性をもつオースティンの「若書き」19作品 本邦初訳」

帯文(背) 「自由な想像力で細密に描かれるパロディの妙味」

帯文(裏) 「いま英米でブーム TVドラマ「自負(高慢)と偏見」や映画「いつか晴れた日に」(原作『分別と多感』)、「待ち焦がれて」(原作『説得』)が話題となり、同時代のピアノ曲のCDや料理のレシピから、金言集や未完成作品のリメイクまで出版されている」

使用原書 「テキストとしてはR. W. チャップマン編のオースティン全集第6巻『小作品集』(*Minor Works*) [オックスフォード大学出版局、1954年発行]を使用し、ペンギン版、ワールズ・クラシックス版の各テキストおよびその注を随時参照した。テキストにはオースティンの原稿の不備があえてそのまま残されており、本書にもそれを踏襲したところがある。」

解説 オースティンは12歳から18歳にかけて書いた小品を3冊のノートに清書され、それぞれ *Volume the First*, *Volume the Second*, *Volume the Third* のタイトルを付した。本訳書は *Volume the First*, *Volume the Second* に収められた19作品を訳したもの。「愛と友情」、「レズリー城」、「イングランドの歴史」以外は本邦初訳である。

本訳書刊行時の訳者たちの所属は以下の通りである。都留信夫(明治学院大学教授)、市川薫(広島修道大学助教授)、清水明(信州大学教授)、高倉章男(山口大学助教授)、津久井良充(高崎経済大学教授)、戸田勉(山梨英和短期大学教授)、中井理香(東京家政大学非常勤講師)、向井秀忠(松山大学助教授)、谷田恵司(東京家政大学助教授)。

36 『エリナとメアリアン—分別と多感—』

訳者 伊吹知勢

初版発行 1996[平成8]年9月5日

発行所 文泉堂出版

収録作品 『エリナとメアリアン—分別と多感—』

体裁 21.5×15.5cm。クロス装、丸背、函。

構成 扉、本文(2段組) pp.3-270. 解説 pp.271-280.

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解説 *Sense and Sensibility* の訳本。「ジェイン・オースティン著作集」全5巻内の第1巻として刊行された。すでに見たように、*Sense and Sensibility* の伊吹知勢訳は3度刊行された。本書の奥付にはどの版を使用したか明記されていないが、版組やページ数から、『エリナとメアリアン—分別と多感—』(伊吹知勢訳、河出書房、昭和27年5月30日)を用いていることは明らかである。「内容見本」には全巻内容のほかに、「略年譜」、「刊行のことは」、「刊行によせて」が掲載されている。そのうち、「刊行のことは」と「刊行によせて」を紹介しておく。

「刊行のことは」(津田塾大学名誉教授 近藤いね子)

ジェイン・オースティンは日本ではブロンテ姉妹ほど大衆には知られていないが、200年後の現在もなおその名声を高め、英国小説史に燦然と光る閨秀である。自ら「小説家として最も無知無教養な人間」と称し、一見、平凡な一生を送ったと見えるが、彼女は19世紀に開花した英国近代小説の伝統を継承、これを大成し、今世紀のヘンリ・ジェイムズ、ヴァージニア・ウルフにまで発展させた天才である。夏目漱石が即天去私の文学の好例としたように、彼女があらゆる経験

を完全に燃焼し、創作の坩堝の中にとかし切っている点、よくシェイクスピアに比べられる。今回『エマ』を除いた全完成作の名訳に初期の若々しい『愛情と友情』を加えて復刊、広く日本の読者に紹介されることは誠に幸いである。

「刊行によせて」

「ジェイン・オースティン著作集の刊行を心から歓迎する」(金城学院大学教授 榎本太)

オースティンの小説について言い古された言葉は「田舎の三・四軒の家族」が最適の題材だという彼女自身の言葉である。しかしこの言葉にもかかわらず、彼女の作品は決して田舎の一部に局限されていたわけでもない。その作品の世界は18世紀末から19世紀初頭のイギリス社会をかなりの広がりをもって示している。イギリスとくにその田舎はこの時代に最も美しい様相を呈していたといえる。また彼女の小説の舞台は純然たる田舎風というよりはむしろ都会と緊密に結びついた一種の洗練さを保持していた。こうした特質により彼女の作品は多くの18世紀小説の稚拙さからも、また次の時代の粗雑さからも不思議と解放され主に人間関係の諸相を見事に示すものとなっている。今回の著作集の刊行を心から歓迎する。

「オースティン文学の魅力」(明治学院大学教授 都留信夫)

オースティンの作品は小説の方法に対する信頼の上に成り立つ。一定の社会的条件の下に生きる人間たちと、そこに発生する事件が緊密に結びつき、必然的に事態が進展し、最後には落ち着くべきところに帰着する。すべてが作品の枠内に収まっているように感じられ、読者は物語の運びに納得する。もちろん実際の人生や社会にはこの枠をはみ出すもろもろの問題があり、作者自身それを承知しているが、彼女はその存在を暗示するにとどめ、物語は日常的・等身大な次元を離れない。それが彼女の考える小説であり、だから彼女の小説には推理小説を読むように楽しさがあるが、同時にそこに限界を感じると読者も出てこよう。この選集を通じてそうしたオースティン文学の問題を改めて探ってみたい。

「ジェイン・オースティン著作集刊行によせて」(日本女子大学教授 出淵敬子)

ジェイン・オースティン著作集全5巻の刊行はまさにタイムリーな企画で、喜ばしい。

インターネットが世界を結ぶ現在、「もうオースティンからは卒業したら・・・」という声もあるが、どうしてどうして、映画もビデオも競ってオースティンの作品をとり上げている。インターネットの情報によれば、彼女の小説の続篇は52篇にのぼるといふ。日本人によるオースティン研究が、最近、新鮮な展開を見せているのもうれしい。「田舎の三・四家族」というミクロの宇宙の中にどこにも見られる人間性を皮肉とユーモアに包んで封じこめたオースティンの作品世界は、次々と新しい読み方が可能である。「オースティンを卒業する」時がくるとしたら、それはわたしたちが人間であることをやめる時である。今回の企画に『エマ』が入っていないのは残念だが、絶版などで入手し難かったオースティンの日本語訳がまとめられた結果、ますます愛読者が増えることを期待している。

なお、「ジェイン・オースティン著作集」はセット物として販売されたため、各巻の奥付等に定価は示されていない。全5巻の定価は65,000円(本体63,107円)であるから、一巻当たりの定価は12,620円となる。

37 『高慢と偏見・説得』

訳者 伊吹知勢・近藤いね子訳

初版発行 1996〔平成8〕年9月5日

発行所 文泉堂出版

収録作品 『高慢と偏見』、『説得』

体 裁 21.5×15.5cm。クロス装、丸背、函。
 構 成 『高慢と偏見』『主な主要人物』一覧 p.4. 本文(二段組)pp.5-314.
 『説得』『主な主要人物』一覧 p.316. 本文(二段組)pp.317-526.
 「解説」(二段組)pp.527-547. 写真7枚。
 「主要参考文献」(二段組)pp.547-548.
 「年譜」(三段組)pp.549-553.

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解 説 *Pride and Prejudice* との訳本。「ジェイン・オースティン著作集」全5巻内の第2巻。奥付の左端に「(世界文学全集21 講談社版)」とあるように、「豪華版世界文学全集」の復刻版である。

38 『マンズフィールド・パーク』

訳 者 白田昭
 初版発行 1996[平成8]年9月5日
 発行所 文泉堂出版
 収録作品 『マンズフィールド・パーク』
 体 裁 21.5×15.5cm。クロス装、丸背、函。
 構 成 「本文」(2段組)pp.5-412.
 「後記・注解」(2段組)pp.415-417.
 「解説」(2段組)pp.419-428.
 「年譜」(2段組)pp.429-430.

使用原書 「翻訳のテキストとして用いたのは、オクスフォード英国小説集中のもの(1970年)である。ときとしてペンギン版(1975年)、チャップマン編の全集版(1953年)をも参照した。」

解 説 *Mansfield Park* の訳本。「ジェイン・オースティン著作集」全5巻内の第3巻として刊行。奥付の左端に「(世界文学全集17 集英社版)」とあるように、「集英社版世界文学全集」第17巻『マンズフィールド・パーク』(1978[昭和53]年11月25日)の復刻版である。ただし、巻頭口絵と目次の裏頁にあった「1800年ごろのポーツマス」と題する略図は省かれている。

39 『ノーザンガー寺院』

訳 者 富田彬
 初版発行 1996[平成8]年9月5日
 発行所 文泉堂出版
 収録作品 『ノーザンガー寺院』
 体 裁 21.5×15.5cm。クロス装、丸背、函。
 構 成 「本文」pp.5-293. 「あとがき」p.295.

使用原書 「Jane Austen: *Sense and Sensibility*. 1856. London: Egerton. を使用した。」

解 説 *Northanger Abbey* の訳本。「ジェイン・オースティン著作集」全5巻内の第4巻として刊行。奥付の左端に「(角川書店版)」とあるように、B6版角川文庫18として刊行された富田彬訳『ノーザンガー寺院』(1949[昭和24]年7月30日)の復刻版である。

40 『愛と友情』

訳 者 大久保忠利

初版発行 1996〔平成8〕年9月5日

発行所 文泉堂出版

収録作品 「愛と友情」、「レスリー城館」、「英國史」

体裁 21.5×15.5cm。クロス装、丸背、函。

構成 「まえがき」(G. K. チェスタトン) pp.3-16.

「愛と友情」pp.17-103.

「レスリー城館」pp.106-177.

「英國史」pp.179-210.

「譯者の言葉」pp.211-215.

解説 “Love and Freindship” (1790)、“The History of England” (1791)、“Lesley Castle” (1792)の訳本。「ジェイン・オースティン著作集」全5巻内の第5巻として刊行された。奥付には元版についてはなにも記されていないが、大久保忠利訳『愛と友情』実業之日本社、1943〔昭和18〕年3月16日)の復刻版である。

41 『高慢と偏見』

訳者 阿部知二

初版発行 1996〔平成8〕年11月1日

発行所 河出書房

定価 950円(本体922円)

収録作品 『高慢と偏見』

体裁 14.9×10.6cm。紙装、角背、カバー。

構成 アート紙4葉に英国BBCテレビドラマ*Pride and Prejudice*のステール写真13枚、扉、「主な登場人物」p.6、本文 pp.7-508。「解説」pp.509-522。「巻末エッセイ「女は何をのぞんでいるのか」」(水村美苗) pp.523-528.

カバー惹句 「ロンドン郊外の田舎町に暮らすベネット家には年頃の5人姉妹がいた。ある日の舞踏会で長女ジェインは近所に越して来た青年ビングリーと互いに惹かれ合う。一方、次女エリザベスは、資産家の美男ダーシーに出会う。彼の態度は高慢だったがそう見えたのはエリザベスの偏見に過ぎぬのか。人間観察の鋭いオースティンが軽い皮肉とユーモアを込めて描く世界文学屈指の名編。巻末エッセイ=水村美苗」

解説 *Pride and Prejudice*の訳本。河出文庫オ2-1として刊行された。表紙には英国BBCテレビドラマ*Pride and Prejudice* (1995)でエリザベス・ベネットを演じたジェニファー・エイルとフィッツウィリアム・ダーシーを演じたコリン・ファースが寄り添って花の前に立っているカラー写真が使われている。また、表紙と題扉の間に挿入された上質紙4葉に同テレビドラマの白黒ステール写真13枚が掲載されている。このドラマは英国で大ヒットし、翌年にはNHKBSで放映され、好評を博した。したがって、同年に刊行された本作はテレビドラマ放映に合わせた企画出版と考えられる。

すでに見たように、阿部知二訳『高慢と偏見』は河出書房からこれまで三度刊行された。

『高慢と偏見』阿部知二訳 河出書房新社(グリーン版 世界文学全集Ⅱ-6, 1963)

『高慢と偏見』阿部知二訳 河出書房(カラー版 世界文学全集9, 1968)

『高慢と偏見』阿部知二訳 河出書房新社(河出世界文学大系16, 1980)

本文庫の最後に、「本書は1963年、小社より世界文学全集の一冊として刊行された。」とあるから、「グリーン版 世界文学全集Ⅱ-6」を用いたということになる。しかしこの文庫の「解説」(阿

部知二)の最後に「1968年2月」と記しているから、実際には「カラー版 世界文学全集9」の訳文と解説が使われていることがわかる。事実、挿絵、年表、写真はすべて省かれているが、文章は同じである。ただし、最後の一文「なお『高慢と偏見』では皆河宗二氏、『説きふせられて』では榎林哲氏の協力を得た。」は削除されている。「カラー版 世界文学全集9」の訳文と解説を使いながら、「1963年」とした河出書房の意図は『高慢と偏見』が同社で最初に刊行された年を示しておきたいということであると思われる。

水村美苗は漱石の未完の遺作『明暗』を完成させて『続明暗』(筑摩書房、1990.9)として発表し、1990年の芸術選奨新人賞を得た。その後、『私小説』(新潮社、1995.9)で野間文芸新人賞を、『本格小説』上・下巻(新潮社、2002.9)で読売文学賞を受賞した。また、『手紙、葉を添えて』(朝日新聞、1998年3月)に、「われらのジェーン・オースティン」が収められている。漱石は『明暗』執筆当時、オースティンの*Pride and Prejudice*を念頭に置いて書いていると弟子たちに語った。オースティンをこよなく愛する水村美苗が『明暗』を完成させたことに因縁を感じる。

BBCテレビドラマ『高慢と偏見』の製作スタッフや主な出演者は以下のとおり。

監督：サイモン・ラングトン Simon Langton

製作：スー・バートウィスツル Sue Birtwistle

脚本：アンドルー・デイビス Andrew Davies

音楽：カール・デイビス Carl Davis

出演者：ジェニファー・エイル Jennifer Ehle (エリザベス・ベネット役)

コリン・ファース Colin Firth (フィッツウィリアム・ダーシー役)

スザナ・ハーカー Susannah Harker (ジェイン・ベネット役)

クリスピン・ボナム-カーター Crispin Bonham-Carter (チャールズ・ビングリー役)

ベンジャミン・ウィットロウ Benjamin Whitrow (ミスター・ベネット役)

アリソン・ステッドマン Alison Steadman (ミセス・ベネット役)

エイドリアン・ルーキス Adrian Lukis (ジョージ・ウィッカム役)

ルーシー・スコット Lucy Scott (シャーロット・ルーカス役)

デイヴィッド・バンバー David Bamber (ミスター・コリンズ役)

42 『エマ』

訳者 ハーディング祥子

初版発行 1997[平成9]年2月25日

発行所 青山出版社

定価 2,060円(本体2,000円)

収録作品 『エマ』

体裁 19.4×13.4cm。厚紙装、丸背、カバー、帯。

構成 扉、「登場人物」pp.4-5、本文(2段組、pp.9-451)、「訳者あとがき」(pp.452-454)

帯文(表) 「200年の時を超え、欧米でメガトン・ヒット! / オースティンの最高傑作 / 待望の最新訳 / 読みやすく、格調高く / 映画Emmaエマ / 4月中旬、 / 渋谷・東急文化村ル・シネマ他 / ロードショー / 米国ミラマックス・フィルム制作 / 松竹富士配給」

帯文(背) 「世界で最も愛されている / 18世紀の女流作家 / 待望の最新訳!」

帯文(裏) 「ジョン・グリシャム、マイケル・クライトンを超え、今、最もホットな作家はジェーン・オースティンだ」—ヴァニティ・フェア誌— / ぬくもりのある、冷静なまなざし— 希代の人間観察者、ジェーン・オースティンの / 元祖ロマンチック・コメディ—

解説 Emmaの訳本。ハーディング祥子は翻訳家。1996年製作の米国映画（2時間5分）Emmaの日本公開に合わせて刊行された。なお、この映画は第69回アカデミー賞オリジナル作曲賞（ミュージカル・コメディ部門）を受賞した。

映画『エマ』の製作スタッフや主な出演者は以下のとおり。

監督：ダグラス・マクグラス Douglas McGrath

製作：スティーヴン・ハフト Steven Haft／パトリック・カサヴェッティ Patrick Cassavetti

脚本：ダグラス・マクグラス Douglas McGrath

撮影：イアン・ウィルソン Ian Wilson

音楽：レイチェル・ポートマン Rachel Portman

美術：マイケル・ハウエルズ Michael Howells

編集：レスリー・ウォーカー Lesley Walker

衣装（デザイン）：ルース・マイヤーズ Ruth Myers

出演者：グウィネス・パルトロウ Gwyneth Paltrow（エマ・ウッドハウス役）

ジェレミー・ノーサム Jeremy Northam（ジョージ・ナイトリー役）

エアン・マクレガー Ewan McGregor（フランク・チャーチル役）

トニ・コレット Toni Collette（ハリエット・スミス役）

アラン・カミング Alan Cumming（ミスター・エルトン役）

ポリー・ウォーカー Polly Walker（ジェイン・フェアファックス役）

グレタ・スカッキ Greta Scacchi（ウエストン夫人役）

43 『エマ』

訳者 阿部知二

初版発行 1997〔平成9〕年4月7日

発行所 中央公論社

定価 本体1,800円＋税

収録作品 『エマ』

体裁 18×12.8cm。厚紙装、丸背、カバー、帯。

構成 扉、口絵肖像（カサンドラ筆）、本文（2段組、pp.5-472）、フィリップ・ゴフ（マクドナルド版）の挿画34枚。「解説・年譜」（阿部知二）pp.474-494。写真10枚。

帯文（表）「映画化話題作 定評ある名訳決定版 詳細解説・年譜付」

帯文（背）「映画化話題作」

帯文（裏）「全世界の読者から愛され続けているオースティンの最高傑作一文句なくおもしろく読める」

使用原書 「テキストは、R. W. チャップマン博士編纂の「ジェイン・オースティン」小説集（5巻、オクスフォード大学出版部、初版1923年）の第4巻「エマ」を使用した。…挿画はマクドナルド版、フィリップ・ゴフ画を掲載した。口絵のオースティン像は姉カサンドラが描いたもの（ロンドン・ナショナル・ポートレイト・ギャラリー蔵）である。」

解説 Emmaの訳本。1995〔平成7〕年1月20日に刊行された「新装世界の文学セレクション36」第8巻（第33回配本）『オースティン エマ』を、表紙とカバーのデザインを変え、タイトルも『オースティン エマ』から『エマ』と変更して再刊したもの。帯文にもあるように、映画『エマ』の公開（4月中旬上映）に合わせて、「新装世界の文学セレクション36」第8巻を単独で刊行したもの。カバーの折り返し部分にオースティンの略歴（表）と「主な登場人物」（裏）に印刷されてい

るのも「新装 世界の文学セレクション36」第8巻と異なる点である。

44 『自負と偏見』

訳 者 中野好夫

初版発行 1997〔平成9〕年7月30日

発行所 新潮社

定 価 781円

収録作品 『自負と偏見』

体 裁 15.1×10.8cm。紙装、角背、カバー。

構 成 扉、本文(pp.5-593)。カバー装画 杉山邦

カバー惹句 「イギリスの田舎町、五人姉妹のベネット家の隣に、青年紳士ビングリーが引越して来る。温和で美しい長女ジェーンと才気溢れる次女エリザベス、そして快活なビングリーとその親友で気難し屋のダーシー。ところが、エリザベスが傲慢で鼻持ちならぬ男と考えていたダーシーが、実は誠実で賢明な紳士だと判った時…。二組の恋の行方と日常を鋭い観察眼とユーモアで見事に描写した名作。」

解 説 *Pride and Prejudice* の訳本。「新潮文庫」5171オ-3-3として刊行された。1963〔昭和38〕年6月30日に上・下巻として刊行されたものを1冊として刊行したもの。したがって、訳文及び解説はそのままである。

45 『ノーサンガー・アベイ』

訳 者 中尾真理

初版発行 1997〔平成9〕年10月10日

発行所 キネマ旬報社

定 価 本体2,200円+税

収録作品 『ノーサンガー・アベイ』

体 裁 19.8×13.5cm。厚紙装、丸背、カバー、帯。

構 成 扉、「『ノーサンガー・アベイ』に寄せる作者からのお知らせ」p.3、地図と銅版画pp.4-6、本文pp.8-277、付録「アン・ラドクリフ作『ユードルフォの謎』(1794年)より」及び『森のロマンス』(1792年)」pp.278-282、「訳者あとがき」pp.283-293。

帯文(表) 「「いつか晴れた日に一分別と多感」「エマ」そして…/19世紀イギリスが誇る女流作家/ジェーン・オースティン待望の新訳/南イングランドを舞台に、普通の女の子がヒロインになるまで一/風刺性、喜劇性をあわせもつ、オースティンならではの恋愛世界が広がる」

帯文(背) 「待望の新訳！」

帯文(裏) 「『ノーサンガー・アベイ』は、キャサリン・モーランドという17歳の若い女性を主人公に、前半はファッションナブルな温泉保養地バースを舞台に、後半はグロースタシャーの裕福な地主の家ノーサンガー・アベイに場所を移して、繰り広げられる。バースでは裕福な地主アレン夫妻や新興フルジョアのソープ一家を中心に、社交場や遊歩道などを舞台に都市小説風の展開を見せ、ノーサンガーでは怪奇小説的要素を加え、地方地主の古い屋敷を舞台に裕福な地主の生活ぶりを浮かびあがらせるしかけである。

使用原書 「テキストは*The Novels of Jane Austen* ed. R. W. Chapman (3rd edn, 5vols, Oxford, 1923)を用い、適宜、他の版も参照した。」

解説 Northanger Abbeyの新訳。Sense and SensibilityやEmmaの映画化がNorthanger Abbeyの新訳刊行の追い風になったようである。訳者による経緯を紹介しておく。「『ノーサンガー・アベイ』はかつて富田彬氏の訳があったが、その『ノーサンガー寺院』（角川文庫・1948年）が手に入らなくなって久しくなる。ジェーン・オースティンは大学の英文科あたりでは人気があるが、その割に余り一般受けがしないのか、『自負と偏見』、『エマ』、『説得』以外にはなかなか翻訳で読むことができなかった。最近、ジェーン・オースティンが注目され始め、かつて読めなかった作品が翻訳され、復刻がされるようになったことはオースティンの読者として嬉しいかぎりである。私は以前からこの作品を訳してみたいと思い、半分ばかりは訳してあったのだが、今回キネマ旬報社のおはからいで『ノーサンガー・アベイ』として全訳することになった。」

46 『サンディトン ジェイン・オースティン作品集』

訳者 都留信夫監訳

初版発行 1997〔平成9〕年11月28日

発行所 鷹書房弓プレス

定価 本体2,500円＋税

収録作品 「イヴリン」、「キャサリンあるいは東屋」、「ある小説の構想—各方面から得た手がかりに基づく」、「ワトソン家の人々」、「サンディトン」

体裁 19.5×13.5cm。厚紙装、丸背、カバー、帯。

構成 扉、「まえがき」（都留信夫）pp.1-2.

「イヴリン」（向井秀忠訳）pp.7-24.

「キャサリンあるいは東屋」（市川薫／向井秀忠訳）pp.25-88.

「ある小説の構想—各方面から得た手がかりに基づく」（谷田恵司訳）pp.89-93.

「ワトソン家の人々」（清水明／高倉章男訳）pp.95-170.

「サンディトン」（谷田恵司／津久井良充訳）pp.171-264.

「解説」（向井秀忠）pp.265-286.

帯文(表) 「静かだが確固たる価値観に支えられた辛辣なる人間諷刺で、現代に通じる文学性をもつオースティン若書き・絶筆等5作品 本邦初訳」

帯文(背) 「自由な想像力で／細密に描かれる／パロディの妙味」

帯文(裏) 「いま英米でブーム／TVドラマ「自負（高慢）と偏見」や映画「いつか晴れた日に」（原作『分別と多感』）、「待ち焦がれて」（原作『説得』）が話題となり、同時代のピアノ曲のCDや料理のレシピから、金言集や未完作品のリメイクまで出版されている。／姉妹編美しきカサンドラ ジェイン・オースティン初期作品集」

使用原書 「翻訳にあたってはチャップマン版を基本にしながらも、B. C. サザムによるその改訂版、ペンギン版の『オースティンおよびブロンテの初期作品集』と『レディー・スーザン、ワトソン家の人々、サンディトン』、ワールズ・クラシックス版の『キャサリンその他』、カナダ・ジュヴェニア社『キャサリン』の各テキスト、解説、および注釈を参照した。」

解説 オースティンは12歳から18歳にかけて書いた小品を3冊のノートに清書し、それぞれVolume the First, Volume the Second, Volume the Thirdのタイトルを付した。本訳書はVolume the Thirdに収められた5作品を訳したもの。すべて本邦初訳である。なお、「解説」中に、他の作家によるオースティン作品の後日譚や続編についての紹介がある。

主要参考文献

- 池田哲郎『日本英学風土記』（篠崎書林、1979〔昭和54〕年7月7日）
- 石塚虎雄『ジェイン・オースティン研究』（興文社、1969〔昭和44〕年4月15日）
- 石塚虎雄『ジェイン・オースティン小説論』（篠崎書林、1974〔昭和49〕年8月25日）
- 伊吹知勢『オースティンとウルフ——伊吹知勢論文集——』（伊吹令人、1984〔昭和59〕年4月11日）
- 『岩波文庫総目録 1927-1987』（岩波書店、1987〔昭和62〕年7月16日）
- 榎本みな子『オースティンの小説とその周辺』（英宝社、1984〔昭和59〕年12月10日）
- 海老池俊治『Jane Austen 論考』（研究社出版、1962〔昭和37〕年7月25日）
- 大内脩二郎『研究社英米文学評傳叢書37 ジェイン・オースティン』（研究社、1934〔昭和9〕年8月20日）
- 大島一彦氏『ジェイン・オースティン 「世界一平凡な大作家」の肖像』（中公新書、1997〔平成9〕年1月25日）
- 岡田みつ註訳『*Pride and Prejudice*』（研究社、1923〔大正12〕年3月20日）
- 落合雄三編『栃木県近代文学アルバム』（栃木県文化協会、2000〔平成12〕年7月15日）
- 笠原勝郎『英米文学翻訳書目 各作家研究書付』（沖積社、1990〔平成2〕年7月7日）
- 笠原勝郎『昭和を彩った英文学者たち——生涯と書誌』（沖積社、1996〔平成8〕年12月18日）
- 近藤いね子『英國小説と女流作家——オースティンとウルフ——』（研究社出版、1955〔昭和30〕年12月25日）
- 国立国会図書館編『明治・大正・昭和翻訳文学目録』（風間書房、1959〔昭和34〕年9月25日）
- 塩谷清人『ジェイン・オースティン入門』（北星堂書店、1997〔平成9〕年3月18日／増補版2001〔平成13〕年3月21日）
- 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』（成美堂、1995〔平成7〕年1月25日）
- 『世界名作大観豫約募集見本及規定』（1925〔大正14〕年3月）
- 『漱石全集』第9巻「文學論」（岩波書店、1966〔昭和41〕年8月23日）
- 惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究——オースティンと言葉の共謀者達——』（旺史社、1993〔平成5〕年6月20日）
- 田辺昌美『ジェイン・オースティンの文学』（あぼろん社、1965〔昭和40〕年2月1日）
- 田辺昌美『改訂 ジェイン・オースティンの文学』（あぼろん社、1981〔昭和56〕年10月25日改訂版2刷）
- 田村道美『漱石と豊一郎・弥生子——*Pride and Prejudice*をめぐって——』（香川大学教育学部研究報告第1部）第84号（香川大学教育学部、1992〔平成4〕年1月）
- 田村道美『野上弥生子と「世界名作大観」（五）——『高慢と偏見』上巻——』（香川大学教育学部研究報告第1部）第93号（香川大学教育学部、1995〔平成7〕年1月）
- 田村道美『野上弥生子と「世界名作大観」——野上弥生子における西欧文学受容の一側面——』（香川大学教育学部研究叢書7、1999〔平成11〕年1月）
- 田村道美〔ほか〕『絶版文庫三重奏』（青弓社、2000〔平成12〕年9月15日）
- 津田塾大学「文学研究」同人編著『ジェイン・オースティン——小説の研究——』（荒竹出版、1981〔昭和56〕年4月20日）
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第1号（オペロン社、1938〔昭和13〕年1月13日）
- 東大英文学研究会編『オペロン』第2巻第2号（オペロン社、1938〔昭和13〕年8月1日）
- 直野裕子『ジェイン・オースティンの小説——女主人公をめぐって——』（開文社出版、1986〔昭和61〕年3月30日）
- 中村真一郎『本を読む』（新潮社、1982〔昭和57〕年7月20日）
- 日外アソシエーツ編『世界文学総覧シリーズ1 世界文学全集・内容総覧』上・下（日外アソシエーツ、1986〔昭和61〕年2月10日）
- 日外アソシエーツ編『世界文学総覧シリーズ2 世界文学全集・作家名総覧』上「西洋人名」（日外アソシエーツ、

1986〔昭和61〕年5月10日)

日外アソシエーツ編『世界文学総覧シリーズ3 世界文学全集・作家名総覧』上・下(日外アソシエーツ、1986〔昭和61〕年7月10日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録45/76 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1991〔平成3〕年3月25日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録77/84 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1984〔昭和59〕年12月25日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録84/88 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1988〔昭和63〕年7月22日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録88/92 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1992〔平成4〕年12月21日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録92/96 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1997〔平成9〕年7月25日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録1996-2000 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、2000〔平成12〕年1月26日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録2000-2003 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、2004〔平成16〕年8月25日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録2004-2007 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、2008〔平成20〕年5月26日)

日外アソシエーツ編『翻訳図書目録明治・大正・昭和戦前 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、2007〔平成19〕年1月25日)

日外アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録45/75 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1996〔平成8〕年5月20日)

日外アソシエーツ編『全集・合集収載翻訳図書目録76/92 III. 芸術・言語・文学』(日外アソシエーツ、1996〔平成8〕年4月21日)

日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報45/92』(日外アソシエーツ、1994〔平成6〕年1月20日)

日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報93/97』(日外アソシエーツ、1999〔平成11〕年2月26日)

日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報1998-2000』(日外アソシエーツ、2001〔平成13〕年9月25日)

日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報2001-2003』(日外アソシエーツ、2004〔平成13〕年12月27日)

日外アソシエーツ編『翻訳小説全情報2004-2006』(日外アソシエーツ、2007〔平成13〕年7月25日)

野上豊一郎『「誇と偏見」について』『英語文学』第3巻第4号(緑葉社、1919〔大正8〕年4月5日)

『野上彌生子全集』第23巻「評論・随筆6」(岩波書店、1982〔昭和57〕年4月7日)

『野上彌生子全集』第Ⅱ期第1巻「日記1」(岩波書店、1986〔昭和61〕年11月6日)

『野上彌生子全集』第Ⅱ期第2巻「日記2」(岩波書店、1986〔昭和61〕年12月8日)

『野上彌生子全集』第Ⅱ期第15巻「日記15」(岩波書店、1989〔平成1〕年7月27日)

『野上彌生子全集』第Ⅱ期第21巻「翻訳4」(岩波書店、1987〔昭和62〕年9月7日)

長谷川なほみ「Jane Austen 翻訳書目」『文献探索2000』(金沢文圃閣、2001〔平成13〕年2月23日)

樋口欣三『ジェーン・オースティン——喜劇的ヴィジョンの展開——』(英宝社、1984〔昭和59〕年3月1日)

蛭川久康著訳『講座イギリス文学作品論3 ジェイン・オースティン』(英潮社、1977〔昭和52〕年7月1日)

藤田清次『評伝 ジェーン・オースティン』(北星堂書店、1981〔昭和56〕年3月20日)

宮崎孝一『オースティン文学の妙味』(鳳書房、1999〔平成11〕年3月21日)

森田草平『續夏目漱石』(甲鳥書林、1943〔昭和18〕年11月10日)

柳内茂雄『オースティンの手法』(リーベル出版、1988〔昭和63〕年11月22日)

G. K. チェスタトン著、安西徹雄訳『G. K. チェスタトン著作集8 ヴィクトリア朝の英文学』(春秋社、1979〔昭和54〕年4月10日)

クレア・トマリン著、矢倉尚子訳『ジェイン・オースティン伝』(白水社、1999〔平成11〕年10月5日)

ディアドリー・ル・フェイ著、川成洋監訳・太田美智子訳『大英図書館シリーズ作家の生涯 図説ジェイン・オースティン』（ミュージアム図書、2000〔平成12〕年 月日の記載なし。）

David Gilson, A Bibliography of Jane Austen (Clarendon Press・Oxford, 1982)

The Novels of Jane Austen, 10 vols., ed. By R. B. Johnson (J. M. Dent, 1892)

Jane Austen, Pride and Prejudice (London: Macmillan & Co. 1898)

Jane Austen, Pride and Prejudice (Everyman's Library, 1906/ Reprinted 1941)

Jane Austen, Love and Friendship and Other Early Works, now first printed from the original MS. with a preface by G. K. Chesterton (Chatto & Windus, 1922)

The Novels of Jane Austen, 6 vols., ed, by R. W. Chapman (Oxford University Press, 1923-54)